



境川沿いの風景

漁村時代を語る路地の町 浦安元町



浦安市は元町・中町（第1期埋立）・新町（第2期埋立）の3地域からなる。対象敷地は、元町にある猫実・堀江地区。



住みなされた路地空間



井戸とたらいのある趣き深い家



徹底した現地での空間調査、地域との対話による地域に入り込んだ実践的構想づくり

漁村の住文化を継承するデザインコードの抽出

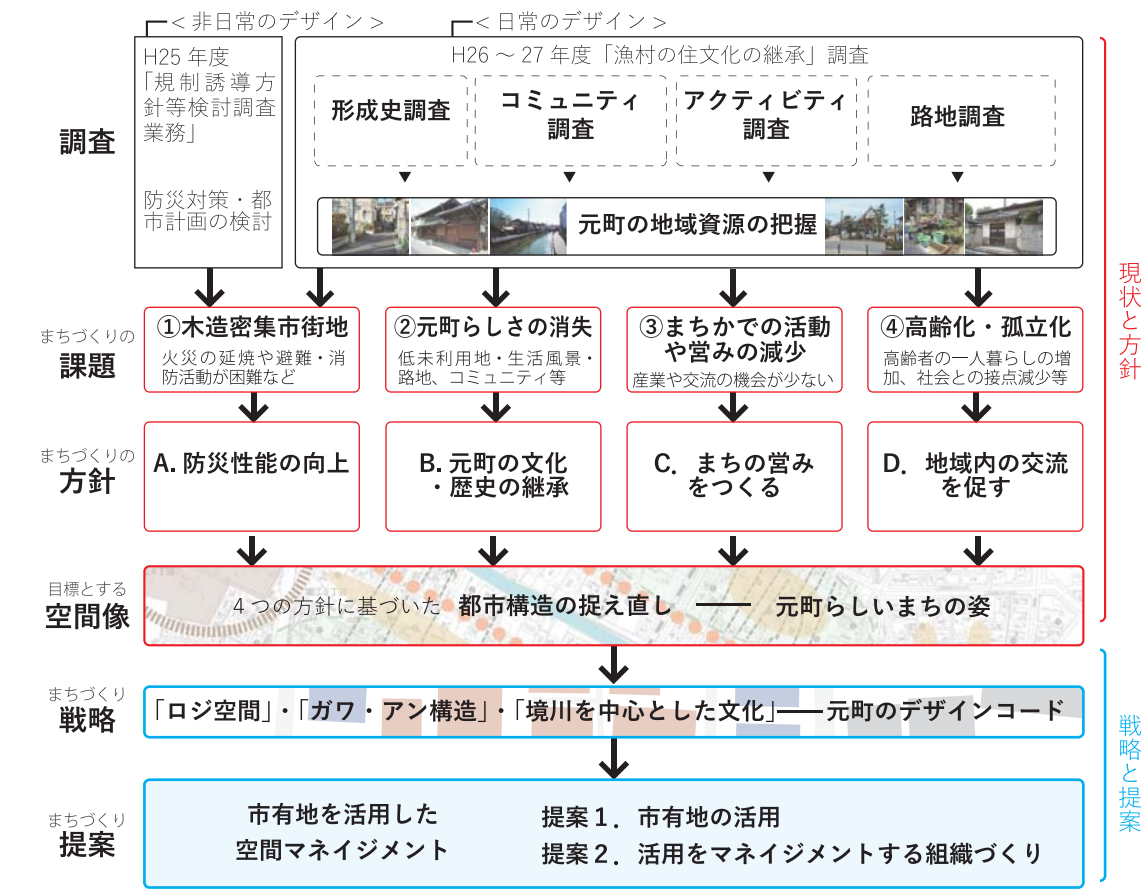


調査研究と地域との対話を通して、漁村の住文化を特徴づける要素を地区のデザインコードとして抽出を行った。

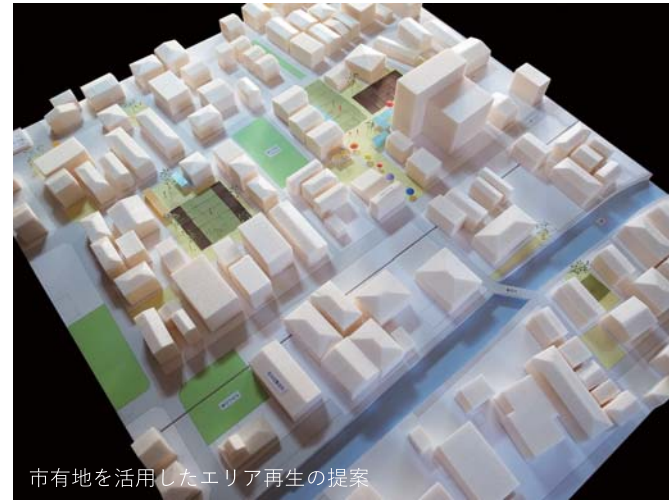
- ①ロジ空間**
 - 外部空間の使いこなし
 - 心地よいスケール感
 - コミュニティの醸成
- ②ガワ・アン街区**
 - お互いさま文化
 - まちの奥行き
 - 静かな住環境
- ③境川を中心とした文化**
 - 水辺のオープンスペース
 - 賑わい回遊路
 - 古民家など漁村文化の物的な点

都市構造の把握からのデザインコード抽出

調査研究から実践への枠組みの構築

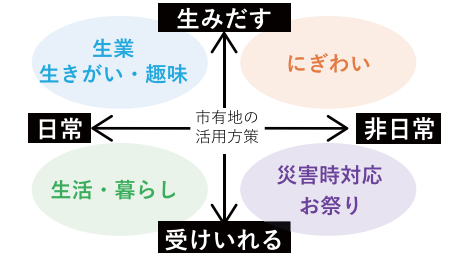


市有地活用による住文化継承+防災性向上+地域活性化の提案



市有地を活用したエリア再生の提案

市は地区の過密状態を解消するため、建て替え困難等の土地の買収を行っており、既に地区内には多くの市有地がある。この市有地を即活用可能なリソースとして捉え、空地である防災上の特性を残しつつ、旧漁村の住文化を活かして地域住民が新しい活動を生み出す日常的なコミュニティの場として活用することを提案している。災害時やお祭り時など非日常においても活躍の場となることを意図している。



活動部門

まちづくり全般

浦安旧漁村の住文化の継承

活動の背景

対象とする猫実・堀江地区は、獵師町として栄え、浦安の中でも古くからの漁村集落であった。地区を東西に流れる境川にべか舟がつけられ、男性はそこから海へ出て漁をし、女性・子どもは家の前の路地や近くの作業場で貝むきや海苔すき作業をして生計を立てていた。しかし、1949年のキティ台風での多大な被害は境川の護岸整備へと進むきっかけとなり、さらに1958年の江戸川工場悪水放流事件を契機に漁業不振に陥り、1971年には漁業権を全面放棄した。その後、都心への通勤圏という立地の良さ、東西線浦安駅の設置もあり、住宅地化が進んでいる。一方で、漁村時代の地割りや古い木造住宅や路地は現在も残っており、木造密集市街地となっている。

首都直下地震が危ぶまれている中で、同時多発火災等の「突発性リスク」を軽減するための防災面の向上は、浦安市においても喫緊の課題として捉えられており、2014年には区画整理事業が一部完了し、地区の中央を南北に通る道路（新中通り）が拡幅・整備された。以前に比べ災害危険度は減ったとはいえ、かつてのような外部空間と一体となった暮らし方は薄れ、個々の生活が内に閉じていき均質化が進んでいる。このように旧漁村の住文化という地区の固有性が次第に失われていく危険性を「進行性リスク」として捉え、突発性・進行性の両リスクに目を向けた対応が求められるのではないかと。

活動の内容

活動は大きく3つある。綿密な現地調査と丁寧な地域との対話を通して、①受け継ぐべき漁村住文化は何かを明確にする②防災性を向上しながら住文化を受け継いでいく実践的手法の開発・提案を行う③提案に基づいた取組みを実践する、の3つである。2014年・2015年は①②をまとめたところであり、2016年は③に取り組んでいる。



応募者 代表: **田中大朗** (株)田中大朗建築都市設計事務所 代表取締役

2002年 東京大学大学院修士課程修了
 2008年 (株)田中大朗建築都市設計事務所設立
 2008年-2014年 東京大学特任研究員
 2008年-田村地域デザインセンター(UDCT)副センター長
 NPO法人 郡山アーバンデザインセンター(UDCKo)副センター長
 2014年-浦安の住文化を活かしたまちづくり研究会会長



共同: **池田晃一** 東京大学特任研究員

2002年 東京大学大学院修士課程修了
 2014年- 東京大学特任研究員
 2014年- 田村地域デザインセンター(UDCT)ディレクター
 2014年-浦安の住文化を活かしたまちづくり研究会副会長



共同: **窪田亜矢** 東京大学特任教授

2000年東京大学大学院博士課程修了
 2014年より現職

共同: 東京大学地域デザイン研究室